

FD活動報告

中部大学『魅力ある授業づくり』5年間の取り組みを振り返って

本報告書は、2008年4月に制定した本学FD活動重点目標『魅力ある授業づくり』に関する取り組みを主として2012年度までの5年間にわたる全学的なFD活動について、本学FD委員会（委員長：学長）の専門委員会であるFD活動評価点検委員会がまとめて2013年11月にホームページ上にて公表したものである。

中部大学 FD活動推進に関する主な出来事＜記録＞

本資料は、2000年4月にFD活動の推進部署として大学教育研究センターが設置されてから2013年10月までの全学的なFD活動について、主にFD企画や諸制度、FD関連の掲載記事等を記録としてまとめたものである。

中部大学『魅力ある授業づくり』 5年間の取り組みを振り返って

1. 全学 FD 活動の推進経緯（2007 年度まで）
2. 全学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』の
推進（2008 年度から）
3. FD 活動の検証と効果
4. 今後の全学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』への
取り組みに向けた課題と展開

中部大学 FD 活動評価点検委員会

中部大学『魅力ある授業づくり』5年間の取り組みを振り返って

本報告書は、2007年度に本学FD委員会において検討を行い、2008年4月に制定したFD活動重点目標『魅力ある授業づくり』に関する取り組みを主として5年間の全学的なFD活動について評価点検を行い、今後の展開を明らかにすることを目的としてまとめたものである。

この重点目標は制定当初5年間を目安としていたが、2012年11月に開催したFD委員会において、引き続き2013年度以降も重点目標とすると同時にその意図するところをより明確に学内外に広く提示することが望ましいとして、以下の枠内のとおり定めて公示した。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・(学生にとって)興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
(教員にとって)学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
授業づくり・・・(学生が目指す)自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
(教員が目指す)授業改善、授業スキルアップ
(学生と教員が目指す)双方向のコミュニケーション

1. 全学FD活動の推進経緯(2007年度まで)

本学における記録に残る教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としてのFD(Faculty Development)活動は、1993年に遡る。学長を委員長とした全学自己点検・評価委員会のもと、同委員会・授業評価検討小委員会において教育活動の点検・評価の具体的な方策として「学生による授業評価」の実施に関する検討を開始した。2年にわたる検討を経て「学生による授業評価」は、1995年からマークシートを利用して毎学期実施し、その実施の経緯や全体の分析等は『中部大学通信』124号(1998年2月:現『ウプト』)や同特集号(1999年10月)により、学生をはじめとして学内外に向けて公表した。これらの公表とは別に学内教職員に向けては、個々の授業科目の集計結果など内容的に大きく踏み込んで『ANTENNA』特集号(1998年6月)、『授業評価について』報告書(1999年10月)を発行した。以後、2007年度までにマークシート方式による「学生による授業評価」は、2001年4月、2002年4月の2回の大幅な実施方法の見直しを含めて2008年4月のWebを利用した現行実施方法になるまでの本学「授業評価」の変遷は、教育力の向上を目指すFD活動の評価点検において重要な要因となる。

FD活動の支援組織としては、2000年4月に学長直属の組織として大学教育研究センター(以下、センターという)を設置し、本学の教育全般に関する調査研究と大学教育の改革・改善、質的向上等を目指す活動を推進、支援してきた。センターの設置以降は、2002年9月に本学で初めてのFD研修会を実施するなど、2007年度までの8年間で22回のFD講演会の開催を中心に、「私の授業づくり」を基本テーマとした第1回FDフォーラム(同テーマで6回開催)から延べで14回のFDフォーラムを開催して本学FD活動の礎を築いた。

これらのFD活動とは並行して、2002年度には教員個人の教育活動改善を推奨することを目的とした教育活動・改善表彰制度を全国の大学に先駆けて施行し、他大学等教育関連機関の注目を浴びた。このことは制度施行から2年後の2004年5月の地域科学研究会高等教育情報センター主催のセミナー(発表テーマ:「教育活動・改善表彰制度」本格的導入の総括と今後)を皮切りに2007年度まで計11回の学外機関での発表・紹介の実績に裏付けされている。

2. 全学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』の推進（2008 年度から）

本学は、2007 年 4 月には 6 学部 21 学科を有する総合大学（センターが設置された 2000 年は 4 学部 13 学科、現在は 7 学部 29 学科）となり、新学部等の設置により教員の勤務形態、教育体系、教育方法においてそれぞれ多様化が進んだ。これらの変化は、「教育活動・改善表彰制度」の運用において実態と一致しないことが生じるなど、本学の FD 活動全般の見直しを求めるものとなり、検討課題として 6 項目（①大学院における FD 活動 ②教育活動の表彰制度における課題 ③複数担当者授業における授業評価の実施 ④非常勤講師に対する FD 活動 ⑤FD 活動における目的の明確化と方法 ⑥学生の状況を理解したうえでの FD 活動のあり方）を挙げた。特に②の表彰制度については、2008 年度からの制度の改新も視野に入れて 2007 年度に FD 委員会およびその専門委員会 FD 活動ワーキンググループ（以下、FD 活動 WG という）において検討を進めていくことになった。

FD 活動 WG では同年 5 月の第 1 回 FD 委員会以降、上記課題の解決・改善に向けて検討を重ね、10 月に開催された第 2 回 FD 委員会に以下のとおり提案を行い、2008 年度以降の本学 FD 活動推進方策として承認された。

承認された FD 活動推進方策は、「FD 推進組織体制」の再整備、「教育活動重点目標・自己評価シート」（後述）の改正、FD 活動の重点目標『魅力ある授業づくり』の制定、マークシート方式から Web を利用した「学生による授業評価」への変更、「教員による授業自己評価」の実施、「授業改善アンケートシステム」の提供、および新たな教員表彰制度として「教育活動顕彰制度」の実施などであった。

その後、2009 年度と 2012 年度には FD 活動 WG において、重点目標である『魅力ある授業づくり』のより実質的な推進策を検討するために、学部代表である WG 委員だけではなく“公募”による教員（2009 年度：7 人、2012 年度 5 人）を加えたメンバーで、いずれの年度も 2 つの分科会を設置し、分科会ごとに定めたテーマについて検討を行った。

2009 年度の分科会では「授業オープン化制度の実質化」と「教員研修の制度化」をテーマに検討を行い、新たな FD プログラム「授業サロン」「全学公開授業」および「教員キャリアアッププログラム」の実施について提言した。

また、2012 年度の分科会では「FD 活動重点目標の具現化に向けての検討」と「系統的な教員研修システムの構築」をテーマとして検討を進め、本報告書冒頭に記した FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』の継続をはじめ、授業評価における学生からの自由記述の取り扱い、「教育活動重点目標・自己評価シート」の全学共通項目の設置、「中部大発『魅力ある授業づくり』作品コンクール」「FD カフェ」「中部大学・魅力ある授業づくりプログラム」の実施等について提言を行った。

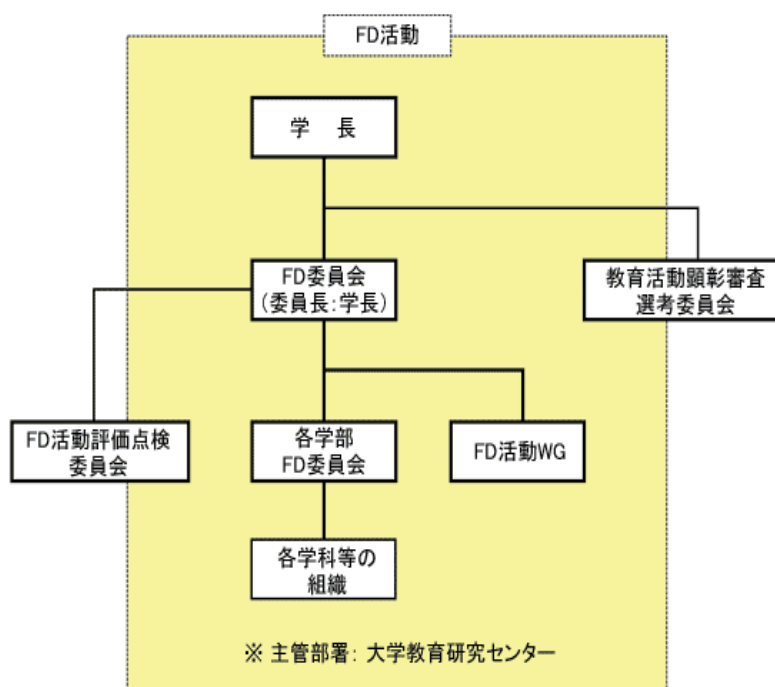
なお、FD 活動の推進、支援部署としてのセンターは、FD 活動へのアプローチとして「明るく、楽しく、元気がある FD 活動」「草の根のごとく浸透する FD 活動（FD ネットワークの構築）」「学外にも広く公開している FD 活動（ホームページへの掲載）」を掲げている。

そして、2011 年 8 月には、2008 年度以降の本学 FD 活動全般について検証することを目的として、日本高等教育開発協会（JAED）主催の第 1 回「高等教育開発フォーラム」において初めて第 3 者評価として FD コンサルテーションを受審した。FD コンサルテーションでは、本学 FD 活動について「授業サロン」をはじめとして概ね良い評価を得た中で、さらに学生参加型の FD 活動について今後検討を進めることが望ましいとの指摘を受けた。

以下に『魅力ある授業づくり』の推進に関する組織や種々の取り組みについて項目別に記す。

1) 本学の FD 活動組織体制

学長を委員長とした FD 委員会を中心に、2008 年度以降、学部 FD 委員会組織の立ち上げを進めて、大学として FD 活動を組織的に推進していく体制づくりを行っている。全学対象の FD 活動は FD 活動 WG が種々の検討を行い、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会を図 1 のように組織して FD 活動全般について評価する体制を整えた。また、これらの委員会に基づいた FD 活動は、センター（2012 年度は兼任教員 3 人、専任事務員 4 人で構成、その他に客員教授を 2 人委嘱）が主管部署として、各活動の推進、支援を行っている。



FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考をする。

図 1 中部大学の FD 活動組織図

2) 教員個人における教育活動の評価点検

2001 年度の教育活動・改善表彰制度の試行以降 2007 年度まで同制度の一環として実施していた「教育活動重点目標カード」を、2008 年度以降は表彰制度とは切り離して本学の FD 活動の礎とすべく「教育活動重点目標・自己評価シート」として 4 月に在籍する全ての教員が年度当初に教育活動に関する重点目標を立て、年度末に自己評価を行っている。目標設定後、および自己評価後は、同シートを学部長、学長が閲覧している。

なお、同シートの様式は 2008 年度以降各学部において個々に定めていたが、FD 活動に関する全学重点目標、それを受けての各学部における目標、さらに組織の構成員である教員個人の目標へと繋げていくために、2013 年度以降は全学で共通する項目として『魅力ある授業づくり』に関する目標項目を設けることになった。

3) Web を利用した授業評価

授業改善に資することを主たる目的として 1995 年から実施している「学生による授業評価」は、2008 年に従来のマークシートを利用したものから Web を利用する新たな方式に大きく変革した。これは、旧方式の課題であった①学期中ごろに実施していたことによる授業が完結し

ていない時点での評価に対する問題 ②特定の授業で実施することによる当該授業の授業時間確保の問題 ③評価者（受講生）へのフィードバックの問題 ④複数担当者科目の未実施の問題等を解消するために検討し、本学の独自システムとして開発、運用したものである。また、授業評価の実施を学期末に移行したことで学期中の授業改善の側面が減少したことを補うために授業の受講生（履修登録者）を対象とする「授業改善アンケートシステム」の提供を大学院の授業を含むすべての授業科目に対して行うこととした。これは、担当教員が学期中何回でも受講生に対してアンケートを取ることができ、設問や回答肢も教員が自由に設定できるシステムで、受講生と授業担当教員とのコミュニケーションツールの一つとして運用された。

これらの授業評価関係のシステムは、2010 年度秋学期から携帯電話を活用した回答を可能とする対応（学生のみ）を行い、2012 年度春学期には急速に普及したスマートフォンへの対応を行うなど社会情勢に合わせてシステム改修を行ってきた。

2010 年の携帯電話による回答への改修時には、同時に「授業改善アンケートシステム」において教員が授業中に受講生の意見をリアルタイムに回収し、その結果を見せることができるクリッカー機能を追加し「Cumoc（キューモ）：Chubu University Mobile Clicker」と名付けた。

さらに、2011 年 7 月には「Cumoc」の関連システムとして研修環境を設けて後述の教員キャリアアッププログラムを実施した。この研修環境は、授業以外に学生のみならず教職員や学外者を回答者として指定できるクリッカー機能を持つアンケートシステム「CumocL（キューモエル）」として、学内に提供することになった。

① Web を利用した「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

2008 年度以降も「学生による授業評価」は授業改善を主たる目的として実施することに変わりはないが、学期半ばでの評価は“授業”の本当の評価を表したものではないとの意見を受けて、授業が完結した学期末に Web を利用して行うことにした。実施科目は、原則として学部授業のすべてを対象とし、授業の形態にかかわらず複数教員で担当する授業科目についても実施した。受講生にとっては、一人の教員で担当しても複数の教員で担当しても“授業”に変わりはないことから、授業評価の結果は“教員”に帰するものではなく、“授業”そのものに帰するものと考え、担当するすべての教員にはその授業に対しての責任の所在を明らかにするものであった。

設問は、授業形態にかかわらず同じ選択形式の設問を 8 問（他に学生自身の状況を問う設問を 2 問）、加えて自由記述欄を設けた。Web を利用したことで受講生は回答期間中であれば“いつでも”“どこからでも”回答できるようになったが、マークシートを授業時間内に半強制的に回収しないため、Web 導入時から危惧されていた回答率は減少した。反面、Web 利用が影響しているかどうかは定かではないが、自由記述の回答数が紙ベースで行っていた旧方式の 10 倍以上（参考：2012 年度春学期 3,789 件、秋学期 2,215 件）に増加した。自由記述の内容も従来は授業への批判的要因をもつ意見が多くを占めたが、Web を利用してからは教員への感謝の言葉や授業改善への提言など前向きな意見が多くみられるようになった。

また、「学生による授業評価」の回答期間中に、教員は担当したすべての授業（複数担当による授業を含む）を振り返って回答する「教員による授業自己評価」を新たに実施した。これにより学生と教員の意識の差について“見える化”を図った。

教員はこれらの回答結果を総合的に分析して、自由記述のまとめを含む教員からのコメントを学内に公開した。教員からのコメントを公開することは、回答者へのフィードバックを目的としていることはもちろんであるが、授業評価もまた学生と教員のコミュニケーション

ツールとしての側面をもつものとなった。

そして、Web を利用した利点として、回答期間終了の“2 日後”に教員は回答結果を閲覧して学生へのコメントを入力でき、教員からのコメントと結果の学生への公開は、回答期間終了から約 1 か月に短縮することができた。このほかにも受講生の振り返りを促す仕組みとして、集計結果の表示画面に受講生自身の回答を一緒に表示するようにしたことも Web を利用した利点である。

②「授業改善アンケート」「Cumoc (キューモ)」システムの提供

「授業改善アンケート」システムは授業評価を学期末に行うことにより、当該受講者に対する授業改善の側面が減少したことを補うシステムとして提供した。このシステムは、教員にその利用を義務付けるものではなく、受講生と教員とのコミュニケーションツールの一つとして提供されたが、その後の回答方法の多様化への改修（携帯電話対応、スマートフォン対応）がクリッカー「Cumoc (キューモ) : Chubu University Mobile Clicker」への発展という同システムにとっての転機をもたらした。

クリッカーは、授業を双方向対話型にするために受講者からアンケートや回答をリアルタイムに回収、結果を公表できる仕組みである。「Cumoc」を用いた授業の運用方法は、教員や授業形態により様々であるが、その回答結果に基づいて授業進度等を随時見直しつつ進行させたり、ティーブレイク的な使い方により受講生の緊張感を持続させる効果、また受講生の授業への参加意識を高める効果などを狙うなどの多様な活用法があり、双方向授業を構成するツールの一つとして展開していくことになった。また、「Cumoc」は、本学独自の開発システムとして学外からも脚光を浴びることとなり、2010 年 10 月以降、5 紙の新聞で報道され、テレビの報道番組でも 3 回（2 局）紹介された。

4) FD プログラム：授業サロンの実施

「授業サロン」は、2009 年度に設置された FD 活動 WG 分科会より提言された学部間を越えた教員（5 人）による互いの授業見学に基づいた意見交換会である。この提言の 1 年前 2008 年当時、FD 活動の一つとして授業コンサルテーションが全国で注目を浴びていた。そこで言われていたのは教育分野の専門家チームによる授業コンサルティングであったが、本学では専門家チームを構成することは実質的に不可能であった。そこで、本学が総合大学であることを生かして同じ分野の教員同士ではなく、あえて異なる分野、文理の壁を越えた教員が互いの授業法について情報・意見交換（異種交流）することで異分野ならではの視点を見出すことができるのではないかと試行の試行というべき有志による第 1 回目の「授業サロン（当時は授業研究会）」を実施した。この企画は、授業を公開することが見学する側される側の双方にメリットをもたらすという「授業オープン化制度」の実質化にも繋がり、また、「授業改善ビデオ撮影支援制度」を活用することで教員自身の振り返りを促し、参加者の好評を得ることができた。この結果を踏まえて、FD 活動 WG 分科会で「授業サロン」を定性的、定量的に実施できるように提言したものである。

「授業サロン」は、“組織的な授業見学、および意見交換会の実施”である。この企画の参加者は、互いの授業見学を材料として、授業の考え方、学生の反応、問題点、工夫、改善案等について、情報交換・意見交換を通じ、教育上における問題対応策や様々なケースにおける授業改善のヒントを見出すことが目的である。

本企画は 2009 年度秋学期に試行実施として 2 グループ実施し、本学 FD 活動の企画として

正式に認められた 2010 年度以降は毎学期 1～2 グループを運営している。この「授業サロン」は、参加者による学部を超えた教員の FD ネットワークを広げることに繋がっており、他大学からも多くの関心が寄せられている。

5) FD プログラム：全学公開授業の実施

「全学公開授業」の実施は、前項の授業サロンとともに 2009 年度に設置された FD 活動 WG 分科会において「授業オープン化制度」の実質化を目的として提言されたものである。「全学公開授業」は、授業サロンのような組織的な授業研究会とは異なり、簡易に単発的に授業担当者が実施できるという利点がある。具体的には、授業の公開を希望する教員を講師として募り、公開日を調整した後に、当該授業の授業紹介シートを公表して授業見学者を募る。見学者は教員に限らず、見学後に授業見学コメントシートの記入し、授業担当者にフィードバックするという仕組みである。2009 年秋学期以降、毎年 2～3 人が授業を公開している。

6) FD プログラム：FD フォーラム・FD 講演会の開催

センターを開設した 2000 年以降、本学の FD 活動の礎となってきた「FD フォーラム」と「FD 講演会」は、2008 年度以降も 5 年間で様々なテーマについてそれぞれ 4 回と 11 回開催している。特に 2012 年度秋学期には、2012 年 8 月に公表された中教審答申を承けて大学教育の質保証に関するシリーズとして 3 回にわたる FD 講演会を開催するなど、高等教育機関として時機を逸しない、教職員にとって関心が高いテーマを取り上げて開催している。

7) FD プログラム：教員キャリアアッププログラムの開催

前述の「授業サロン」「全学公開授業」と同様に 2009 年度に設置された FD 活動 WG 分科会により提言された「教員キャリアアッププログラム」は、多様化する学生や教育方法に対して教員が知るべき知識や技術を修得できるように少人数で実践的なワークショッププログラムとして実施している。

2009 年 12 月の第 1 回の開催から 3 年半で「授業デザイン（シラバスの書き方、授業の進め方、授業内容など）」4 回、「授業技術・運営（話し方、板書、ノートの取らせ方など）」11 回、「ICT（情報通信技術）」4 回、「学生への応対（私語対策、ほめ方、叱り方、謝り方など）」3 回など延べ 22 回、そのテーマは多岐にわたり教員にとって関心が高いテーマを取り上げて開催している。このプログラムでは、より効果が上がるようにワークショップ形式で受講者を少人数に絞っての実施を心がけており、同じ内容のプログラムを定期的に開催することを目指しているが、講師確保の点で課題が残っている。

なお、同プログラムは、事務職員に対しても SD (Staff Development) プログラムの一環として参加者を募っており、本学 FD 推進における教職協働にも繋がっている。

8) FD プログラム：FD カフェの開催

「FD カフェ」は、2012 年度に設置された FD 活動 WG 分科会により提言された教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している大学教職員にとって必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として、2013 年 3 月に第 1 回を開催した。同プログラムは、教職員が気軽に情報交換や意見交換を行うことで互いの教育力向上を目指しており、この企画への参加者による全学にまたがるネットワークづくりも狙いとしている。「FD カフェ」

は、原則として各回のテーマを定め、話題提供者の概説、ファシリテーターの進行による意見交換というグループ研修の形態として運営している。今後の話題提供については教員からではなく、全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) が提供しているオンデマンド講義の活用なども予定している。

9) 教育活動顕彰制度

「教育活動顕彰制度」(以下、「新制度」という)は、2002 年度に施行された「教育活動・改善表彰制度」(以下、「旧制度」という)を評価点検、課題等を見直すことにより、新たに 2008 年度から施行したものである。これらの新旧の表彰制度は、個人や組織が最善と考えられる教育活動・改善を推進し続けることを推奨し、その業績の顕著な教員等を顕彰する制度の導入が本学の発展のためにも必要であるとの論の上に成り立っている。

旧制度では個人(専任教員)のみが表彰対象であったが、新制度においては旧制度に準じた総合ポイントによる教育活動優秀賞と、学部・学科等組織的な取り組みやグループや非常勤講師も対象とした特筆すべき教育実績を顕彰する教育活動特別賞を設置した。

表 1 は、新制度になってからの 5 年間の受賞者である。新制度になってから教育活動優秀賞を受賞した教員のうち、2 人が 2 度受賞している。

表1. 中部大学教育活動顕彰制度 年度別受賞者数

教育活動顕彰制度	受賞者属性(評価学部)	2008	2009	2010	2011	2012	合計
教育活動優秀賞	工学部	5	2	2	3	8	20
	経営情報学部	1	2	1	1	2	7
	国際関係学部	1	2	2		1	6
	人文学部	2	3	3	2	1	11
	応用生物学部	2	1	1	1	1	6
	生命健康科学部			2	1	4	7
	現代教育学部	－	1	2	1	1	5
	全学共通教育部(教養教育部)	1	1	1	1		4
	小 計	12	12	14	10	18	66
教育活動特別賞	個人	1		1		1	3
	組織・グループ		2			1	3
	小 計	1	2	1	0	2	6
合 計		13	14	15	10	20	72

※本制度では、学部には所属しない教員について評価する学部を別途定めており、「評価学部」という。

新制度における受賞者の審査は、教育活動顕彰審査選考委員会において毎年厳正に行っている。教育活動優秀賞の受賞者は表彰対象者の上位 5 パーセント程度とし、基本的に評価項目が同じために評価の固定化に繋がる恐れがあると考え、受賞を 3 年に 1 回としている。また、教育活動特別賞の選考では、あらかじめ受賞枠を決めて選考するのではなく絶対評価による審査を行うことなどが委員会の申し合わせとして定められている。

そのうえで、制度の公平性をより明確にし、選考経緯の透明性を図ることを目的として、評価する項目とその基準は言うまでもなく、受賞者の選考理由や審査選考委員会による選考総評等をホームページ上に公表することにした。また、旧制度における受賞者への報奨金制度（2006年度から特別教育研修費を支給）は廃止し、大学からは名誉を刻する記念の楯を授与することになった。そして、受賞者は、受賞にあたってコメントをホームページ上において公表することとした。

10) 中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム

このプログラムも 2012 年度に設置された FD 活動 WG 分科会により検討され提言されたものである。

本学では、上述のとおり様々な FD プログラムを企画、実施しており、特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員に対して教育力向上を目指した FD プログラムへの参加を促している。中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムは、従来から実施している FD プログラムを複合的に活用して持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、各種 FD プログラムへの積極的な参加を奨励することも含めて 2013 年度より施行することになった。

本プログラムでは規定の条件を満たした教員に「修了証」を授与し、さらなる持続的な教育力の向上を目指すことを奨励、他の FD 関連プログラムへの積極的な参加を奨励することとしている。本プログラムは、教育活動顕彰制度とともに教員の教育力向上に向けてさらなる授業改善を促す間接的なプログラムではあるが、より多くの修了者を輩出することが望まれ、そのことで本学全体の FD 活動推進に繋がっていく効果を期待している。

11) 非常勤講師に対する FD 活動と職員へのアプローチ

2007 年度までは非常勤講師に対する FD 活動は、「学生による授業評価」の実施以外に特にアプローチをしていなかった。2008 年に本学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』を制定するに当たって、非常勤講師に対しても従来から開催していた「FD フォーラム」「FD 講演会」はもとより、「全学公開授業」「教員キャリアアッププログラム」「FD カフェ」などの各プログラムについて参加を呼びかけることとした。ただし、「授業サロン」はその運営上の問題から対象としていない。非常勤講師については本務の都合等で多くの参加者を見込めるわけではないが、これらのプログラムを随時案内していくことで本学の教育活動や FD 活動に対する姿勢を伝えることになり、非常勤講師に対する啓蒙活動へと繋がっている。そして、本学の教育を担う一員としての非常勤講師は、前述の教育活動顕彰制度における教育活動特別賞の授賞対象にもしており、2010 年度には初めて非常勤講師が受賞している。

このように本学で実施している FD 活動は、本学の教育を担う教員として専任、非常勤に拘らず全てのプログラムが対象となっている。

さらに、「教員キャリアアッププログラム」の項でも記載したが、FD 活動で取り上げている内容が、大学教育を様々な形で支援している事務職員にとっても必要な知識や技術であることから、原則としてほとんどの FD プログラムは全ての事務職員を対象にしており、専任以外の職員も含めて参加を呼びかけるなど大学全体として FD 活動推進に取り組んでいる。

なお、非常勤講師が本来の勤務日（授業日）以外に FD プログラムに参加する場合には、交通費のみ別途支給している。

3. FD 活動の検証と効果

本学の FD 活動を検証するに当たっては、2008 年度から学内外に向けて公表している FD 活動評価点検報告書、各プログラムの実施状況、本学 FD 活動に関する情報発信の状況、他大学をはじめとする学外機関からの評価、そして「学生による授業評価」のデータなどの実績に基づいてまとめる。

1) FD 活動評価点検報告書の公表

本学の FD 活動においては、広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動以外の主に組織的に教育改善を目指した取り組みについて、2008 年度以降毎年度取りまとめている。

組織の単位としての学部や大学院研究科は、「中部大学 FD 活動評価点検について（申し合わせ）」に基づいて、毎年度組織的な FD 活動について目標を設定し、その実績について報告をしている。これらの資料に基づいて FD 活動評価点検委員会が当該年度の「FD 活動評価点検報告書」を取りまとめ、FD 委員会に報告、了承を得たうえで学内外に向けてホームページ上にて公表している。

上記の申し合わせは、2008 年 10 月に制定した「FD 活動評価点検報告書について（申し合わせ）」をベースに 2012 年度までに 4 度の改廃、改正を行うなど、FD 活動の重点目標『魅力ある授業づくり』への取り組みに対して、組織での活動がより実質化するようにその内容や様式を随時検討して更なる教育力向上を目指している。当初は組織間の温度差も感じられていたが、これらの改正に伴い各組織においても重点目標を意識した目標設定に繋がっていくようになり、組織における活動等の実績において『魅力ある授業づくり』の浸透と展開を伺うことができる。

2) 本学 FD 活動の実績

2008 年度に制定した全学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』の推進に際して、従来からの FD フォーラムや FD 講演会に加えて、様々なテーマでアプローチして新しい企画の実施に取り組んできた。これらの新企画の検討に際しては、2008 年度春学期から実施している Web を利用した「学生による授業評価」のデータについて 2009 年と 2010 年に行った分析に基づいた報告を参考にしている。

この 2 回の報告では、「学生による授業評価」における自由記述の分析において受講生が感じる授業の印象が「板書」や「話し方」など授業運営にかかる基本技術にも大きく影響されるとの指摘があり、改めて基本技術の重要性を認識したうえで、教員の意識を高める方策を検討する余地があるなどと提言された。

これらの分析は、センターが毎年発行しているジャーナル『中部大学教育研究』No.9 と No.10 に掲載するとともに、第 16 回、第 17 回の FD フォーラムにおいても報告を行っている。特に第 16 回 FD フォーラムでは参加希望の学生を募集し、『魅力ある授業づくり』に関して教員と学生との意見交換が行うなど、学生参加型の FD 活動という新たな方向性を見出すための試みも行われた。

こういった分析に着目して「教員キャリアアッププログラム」では、『講義のための「話し方の基本」』をテーマにして、日本語の特徴や発声方法、マイクの使い方などに関するプログラムを 2010 年の夏に初めて開催した。同プログラムは、受講定員を 10 人程度と少なく設定してい

るため 2011 年度に 4 回、2012 年度に 3 回開催しており、定期的なプログラムの提供ができて
いる企画の一つとなっている。

表 2 は、2007 年度から 2012 年度にかけて本学で実施した FD 活動の実績一覧である。この
表からもわかるように、本学では 2008 年度以降「授業サロン」をはじめ、「全学公開授業」や
「教員キャリアアッププログラム」などを展開してきた。特に「授業サロン」以外の FD プロ
グラムは、2009 年度 8 企画、2010 年度 9 企画に対して、2011 年度 15 企画、2012 年度 14 企
画と増加している。

また、表 3-1 ではこれらの FD プログラムへの参加者数の実績（述べ人数）を示しており、
専任教員はもとより、事務職員のこれらのプログラムへの参加も着実に増加している。また、
日程的に参加の制約が大きい非常勤講師の参加実績もみられ、大学全体として FD 活動への意
識が高まってきているといえる。表 3-2 は、プログラム参加者の実人数である。この表からは
判らないが、2008 年度から 2012 年度までに 1 回以上参加した教員は、専任教員 349 人、非常
勤講師 62 人である。これらの人数は、この 5 年間に退職した者や赴任した者も含まれるため、
一概に多いとか少ないとかは判断できない。なお、専任教員 349 人の中で 5 年間を通して毎年
1 回以上参加した教員は 31 人であった。

このような全学向けの FD プログラムへの参加状況からもわかるように教育改善への意識の
高まりは、教員個人の点検評価として実施している「教育活動重点目標・自己評価シート」の
提出状況にも表れている。目標設定と自己評価を求めている該当者の提出状況は、在籍教員全
員が対象となるように変更になった 1 年目の 2008 年度こそ 90%あまりであったが、表 4 のと
おり 2010 年度以降は該当者の 97%以上が提出しており、個人の活動が大学全体や組織等の活
動の礎になるような態勢になってきている。

表2. 本学FD活動の年度別開催実績一覧

プログラム	2007	2008	2009	2010	2011	2012
FDフォーラム	2	1	1	1	1	
FD講演会	1	2	2	2	1	4
全学公開授業			2	3	3	2
教員キャリアアッププログラム			3	3	9	7
FDカフェ						1
授業サロン		1	2	2	2	3
その他FD企画		1			1	

※その他のFD企画は、2008年度はFD活動WG委員を対象とした研修会、2011年度は学外他機関
で行われたFD講演会をネット配信にて視聴したライブ講演会である。

※2007年度および2008年度のFDフォーラム(各1回)は、学生参加型のフォーラムとして実施した。

表3-1. 本学FD活動への年度別参加者実績一覧

区分	プログラム	2007	2008	2009	2010	2011	2012
専任教員	FDフォーラム	159	81	73	44	55	
	FD講演会	63	162	117	115	92	242
	全学公開授業			20(6)	30	22	10
	教員キャリアアッププログラム			84	43	67	45
	授業サロン		5	10	10	10	15
	FDカフェ						11
	全学公開授業講師			(2)	3	3	1
	小 計	222	248	304	245	249	324
非常勤講師	FDフォーラム		6	1	7	3	
	FD講演会		8	3	2	2	6
	全学公開授業			4	6	5	2
	教員キャリアアッププログラム			19	3	27	16
	全学公開授業講師						1
	小 計		14	27	18	37	25
学生・院生	FDフォーラム	3	6				
	小 計	3	6				
職員	FDフォーラム	32	8	8	8	13	
	FD講演会	13	20	21	39	19	71
	全学公開授業			3	10	7	3
	教員キャリアアッププログラム			7		28	14
	FDカフェ						2
	小 計	45	28	39	57	67	90
外部	FD講演会	2		2		2	6
	全学公開授業				8		
	教員キャリアアッププログラム					2	
	小 計	2		2	8	4	6
合 計		272	296	372	328	357	445

※その他のFD企画で2011年度のライブ講演会はFD講演会として集計、2008年度のFD活動WG研修会は集計に含めていない。また、2009年度の全学公開授業の(6)と全学公開授業講師の(2)は、授業サロンでの授業公開と兼ねて開催したため、集計外として授業サロンで集計した。

※2007年度および2008年度のFDフォーラム(各1回)は、学生参加型のフォーラムとして実施した。

表3-2. 本学FD活動への年度別参加者実績一覧(実人数)

区分(教員のみ)	2007	2008	2009	2010	2011	2012
専任教員	129	140	148	125	133	162
非常勤講師		13	18	13	29	17
合 計	129	153	166	138	162	179

表4. 教育活動重点目標・自己評価シート 年度別提出状況

年度		2008	2009	2010	2011	2012
年度内在籍者数		423	436	460	493	483
年度始め非在籍者数		11	6	16	12	8
目標設定未依頼		14(2)	9	9(1)	12(2)	9
目標設定提出		373	406	429	459	457
目標提出者の自己評価(内訳)	自己評価提出	357	400	417	453	443
	自己評価未依頼	5(2)	4(1)	7(4)	2	11(6)
	自己評価未提出	11	2	5	4	3
目標設定 自己評価 未提出		25(2)	15(1)	6	10	9
割合(%)		90.8	95.9	97.4	97.0	97.4

※「未依頼」は、何らかの理由で提出依頼をしなかった場合をいう。

※()内数字は、年度途中退職者を内数で表す。

※「割合(%)」は、目標提出・自己評価提出該当者【年度内在籍者から年度始め非在籍者と目標未依頼者と自己評価未依頼者を引いた数】における自己評価提出者の割合を表す。

3) 本学広報誌への情報発信と他大学等学外機関とのFD交流

本学で行っている様々なFD活動を学内外に向けて発信するために、センターでは2008年度以降も数多くの記事を本学広報誌に投稿してきた。2008年度に大きく実施方法が変わったWebを利用した授業評価に関するものは、従来の授業評価とは異なることを学生に周知するために2008年度から2009年度にかけて『ウプト』(季刊で年4回発行)に7つの記事が掲載された。中でも2009年度に発行された170号から173号にかけては、連続4回シリーズ『「魅力ある授業づくり」への一歩』として、2008年度の授業評価にかかる実績データに基づいた学生への啓蒙記事が掲載された。

一方、教職員に向けては、『ANTENNA』にその時々のFD活動に関するテーマに沿った記事を5年間で計12回投稿して掲載された。また、『ANTENNA』には記事と別に、FD活動重点目標を制定することが決定してから「私の授業づくり」コーナーの設置を広報出版室(現広報部制作課)に働きかけて、2008年4月に発行されたNo.85以後、毎号1人ずつ「授業づくり」に対する教育信条や「授業づくり」における具体的な手段や方法について紹介している。

こういった大学広報誌を利用した情報発信を継続的に続けていくことがFD活動への啓蒙活動に繋がっている。

これらの主に学内に向けての活動とは別に、本学 FD 活動について学外他機関に向けても積極的に行ってきた。学外他機関での報告では、他大学に先駆けて実施した表彰制度にかかる報告を数多く行ってきたが、前述の 2011 年 8 月の第 1 回「高等教育開発フォーラム」における FD コンサルテーション受審以降は、授業評価システムや「授業サロン」など個々の FD プログラムに関連した報告が多くなった。2012 年 10 月の名城大学での招待講演をはじめ、その後、愛知工業大学、大学コンソーシアム京都、全国私立大学 FD 連携フォーラム（JPFF）と本学 FD 活動を紹介する機会に恵まれた。また、同様に 2011 年の FD コンサルテーション受審以降、他大学から訪問を受けての聞き取り調査も 4 大学（この他に記録は残っていないが電話等による聞き取り調査もある）、1 機関（ベネッセコーポレーション）と多く、訪問を受けた國學院大学ではその調査内容を『國學院大学 教育開発ニュース Vol.6』に 6 ページにわたって報告されるなど本学以外の機関からも本学 FD 活動の内容が全国に向けて報告された。このような実績からも本学 FD 活動の方向性や推進方策が他機関からも関心を持たれ評価を受けていると判断することができる。

表5. 本学FD活動の情報発信と学外に向けての活動実績一覧

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012
大学教育研究			1	1		
本学広報誌	1	6	7	4	2	2
学外向け活動	2	3	1	5	4	6

4) 授業評価の実績

Web を利用した授業評価の 2008 年度から 5 年間の回答率は、図 2 から図 4 のとおりである。Web を導入する前から危惧されていた学生の回答率は減少したが、5 年の推移をみれば上昇傾向にある。また、教員の自己評価や学生へのフィードバックとなる教員のコメント率も同様に上昇傾向にある。これらの結果は、学生がスマートフォンでも回答できるようにするなどのシステム改修も行ったが、回答率の改善策として学生のみならず教員に対しても「授業評価」への参加を絶え間なく呼びかけ続けていくことで参加意識が高まってきたものといえる。

図 5 と図 6 は、本学の重点目標『魅力ある授業づくり』の文言に沿った設問で授業の総合評価となる設問 8「この授業は総合的に魅力的な授業でしたか。」（教員による授業自己評価：「学生の立場に立った魅力的な授業ができましたか。」）のすべての回答による平均ポイントの推移を示している。「学生による授業評価」が受講生からの直接評価であるがゆえに、図 5 のとおり授業の総合評価ポイントが僅かずつでも上昇していることは、本学が進めている様々な FD 活動が実を結んできていると評価できる。

そして、授業評価においては、選択形式の設問のポイントを意識するだけではなく、多くの学生から届けられている“生の声”（自由記述）に真摯に応えていくことがさらなる授業改善に繋がっていくといえる。そして、授業評価の回答率を上げることばかりに囚われることなく、全学を挙げて授業評価から得られた結果を基にさらなる授業改善に繋がっていくよう非常勤講師も含めた教員の意識を高めるように情報発信を続けていくことが重要である。

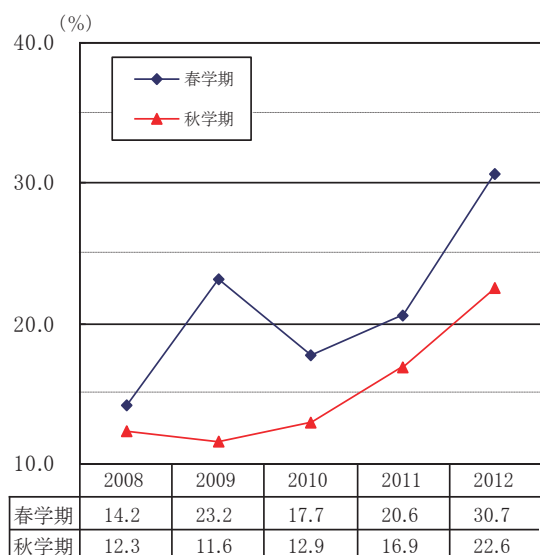


図 2. 学生による授業評価 回答率 年度別推移

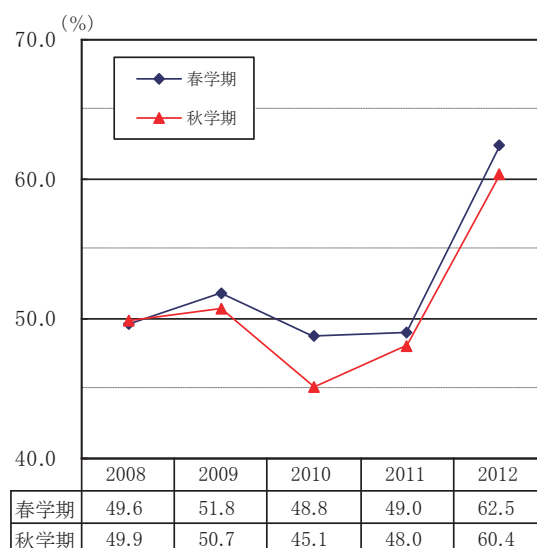


図 3. 教員による授業自己評価 回答率 年度別推移

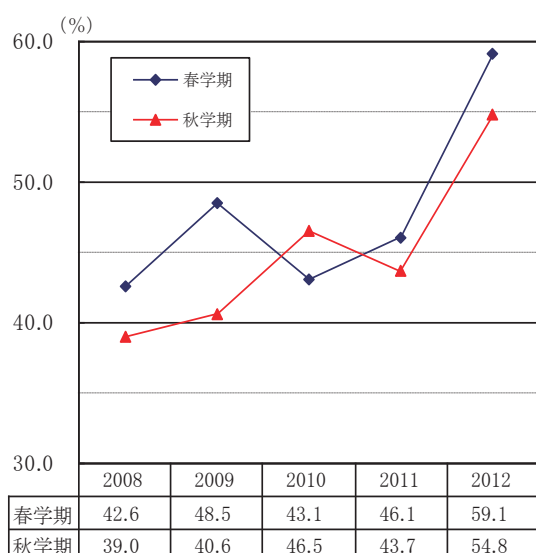


図 4. 授業評価 教員コメント率 年度別推移

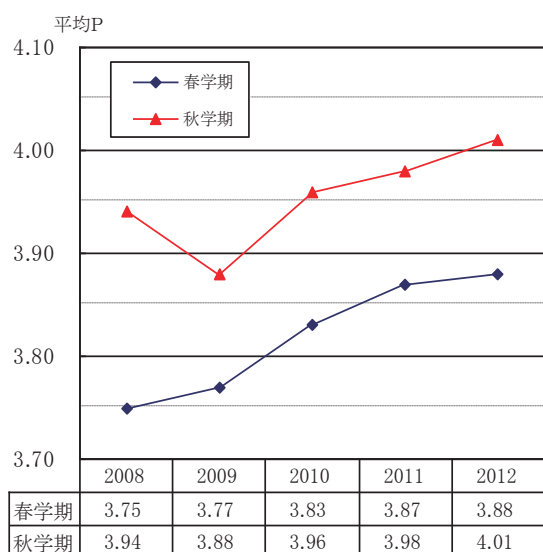


図 5. 学生による授業評価 設問8 年度別推移

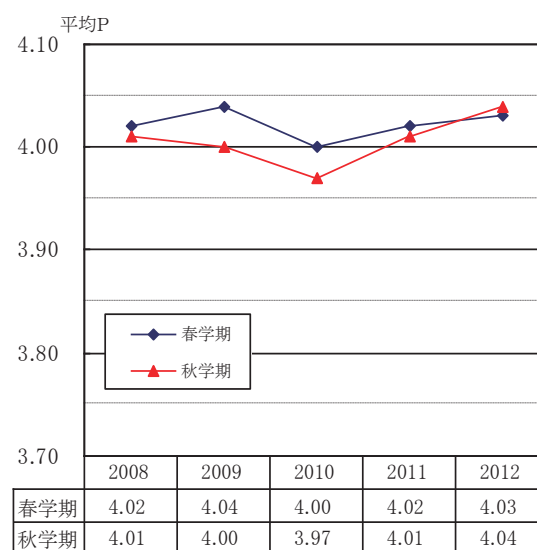


図 6. 教員による授業自己評価 設問8 年度別推移

4. 今後の全学 FD 活動重点目標『魅力ある授業づくり』への取り組みに向けた課題と展開

2008 年度から 5 年間にわたって取り組んできた『魅力ある授業づくり』は、着実にその成果を上げている。「明るく、楽しく、元気がある FD 活動」が、「草の根のごとく浸透する FD 活動」として全学 FD 活動のみならず各学部等における FD 活動のさらなる実質化にも繋がってきており、これらの諸活動は「学外にも広く公開している FD 活動」としてホームページや学内広報誌を通して学内外に様々な形で公表して評価を仰いできた。

今後は、本学のさらなる教育力向上に繋がるものとして、特に 2008 年度から始まった様々な FD プログラムを引き続き持続的に実施していくことが重要である。Web を利用した授業評価においても回答率を上げることに囚われることなく、授業評価から得られた結果に基づいてさらなる授業改善に繋がっていくように全学を挙げて教員の教育力向上に向けての意識を高めるよう推進していく必要がある。

そして、本学の課題である学生参加型の FD 活動の推進においては、2013 年度に実施する『魅力ある授業づくり』作品コンクールが、教育のあり方について学生と教職員がともに考える機会となり、今後の FD 活動を進めていく上で、また、本学の重点目標の浸透を促すうえでの起爆剤となることが期待される。学生と教職員とが協同で行う『魅力ある授業づくり』についての意識の共有により、さらなる授業改善はもちろん、学生の自主的態度の促進に繋がることも期待される。

そのうえで、2013 年度から施行する「中部大学『魅力ある授業づくり』プログラム」においては、新たに赴任された教員だけでなく、すでに在籍している教員からも同プログラムの修了者を輩出していくことが大学全体としての教育力向上に寄与することは言うまでもなく、このプログラムが実質化していくように今まで以上に種々の FD プログラムの充実を図り、大学全体として FD 活動を推進、支援していくことが重要である。